

見

つけた!



クイズです。左にあげた小説に共通する登場人物がいます。誰でしょうか？

A 山田太一著『異人たちとの夏』／B 浅田次郎『うらぼんえ』／C 井上ひさし著『父と暮せば』／D 川上弘美著『九月の精霊』／E 佐藤愛子著『冥界からの電話』／F 筒井康隆著『川のほとり』／G 石沢麻依著『貝に続く場所にて』

不勉強者が「おれ、本いっぱい読んでんだぞ！」と我慢してみてるみたいで、嫌らしいのですが、クイズ「共通する登場人物」は……。『幽霊』です。

こうやって並べてみるとなんとなく幽霊が出てきそうなタイトルばかりに思えますが、Gの『貝に続く場所にて』は、令和三年上半期の芥川賞受賞作。ドイツの地方都市へ留学した日本人女性研究者のもとへ、東日本大震災で行方不明になった、同窓の男子学生が現れます。幽霊です。面白いのは、七月初旬に日本人幽霊はドイツまでやってくるのですが、幽霊を迎えた女性研究者が、〈お盆はあと一か月半ほどではじまるが、ここに留まるのか、それとも「帰国」するつもりなのか〉と心配するシーンが小説中にあります。ドイツ、お盆、幽霊のとりあわせが、不釣り合いでおかしい。

Fの『川のほとり』の川はどの川かというところ、三途の川です。今年、八十八歳になる作家の筒井康隆が「渡し船がだされそうな大きい川で」、「昨年（注）令和二年二月に食道癌で死んだ、五十一歳の息子」と会う、短編小説です。

捨てない生きかた

昨日が見えない者には明日も見えないのです



どに禅を探し、現代に仏教を見つける



冥界からの電話
佐藤愛子

わが仕事部屋の乱雑さをかえりみず、このようなことを申し上げるのは、はなはだ失礼だけど、「部屋が不要品でいっぱい」と、暑いなか悩んでいるあなたに良いお知らせです。「捨てなくてよい」という本が今、ベストセラーになっています。五木寛之著『捨てない生きかた』（マガジンハウス）です。

「断捨離」や「片づけの魔法」なんて言葉がのさばると、その反動で「捨てない」のが、話の種になるのは、世の常というもの。そんな背景から生まれた『捨てない生きかた』には、名言がちりばめられています。ひとつをご紹介しますでしょうか。

「昨日が見えない者には明日も見えないのです」
これだけだと何となくわかったような、わからないような。この言葉の直前には、次のように書かれています。

「今まで生きてきた過去の記憶はたいへん大きな力を持っています」
つまり、過去を捨ててしまったら、昨日が見えない。昨日が見えなければ、明日も見えない。「モノは記憶を呼び覚ます装置である」から、捨てない。というのです。

全部で六章からなっている本ですが、最終章のタイトルは「この国が捨ててきたもの」。これまで書かれなかった、戦争の重い歴史を声静かに語ります。

悲しい時代の記憶も、いつかは忘れ去られてしまいます。でも、記憶を呼び覚ますことができる物をがのこっていれば、思い出して二度とあんな戦はほしくないだろう。だから、物は捨ててはいけない。ズシーンとくる言葉です。

さて、最後に愚痴を少々。この文章を書く数日前に経験した「捨てた人」の話です。

故郷の先祖代々の墓所を片づける人がいます。「墓じまい」なんて言葉は、もともとは石材店が使っていた、石材業界の用

この物語の進行役「おれ」は、作者ご本人なのですが、〈死後の世界などというものをおれは否定している。実際そんな世界などある筈がないのだ。あるというロマンは理解できるが、現実には存在する筈がない〉、と言い切る。そんな作家が、どうして三途の川のほとりに立つのか。その疑問への回答は、冒頭にあげた幽霊の出る小説が、なぜ現代にいくつも創作されるのだろうか、という疑問への答にはかならない。

現代においても、多くの幽霊が創作される疑問を、明確に説き明かしてくれたのは、歌人であり良寛の研究者でもあった吉野秀雄（1902～1967）です。『やはらかな心』という随筆に次のような一節があります。

「わたしは戦争中、前の家内と死に別れた時、あの世がなくては一日も生きておられない、もしあの世がないなら自分で実在させなくてはならぬとまでおもひつめた経験がある」

あの世なんて非科学的だ。あるいは、すべては空になるのだ。そんなのは耐えられない。再び会えないならば、あの世をつくって、あの世で会おうではないか。そういう切ないことばなんです。現代の世にあっても、幽霊の物語がいくつも創作されるのは、物語ることによって、人は哀しみを消化しようしているのではないだろうか。

ならば、物語をつくる事ができない人間はどうすればよいか、それは、近いうちに。さて、吉野秀雄は、再婚します。再婚相手は八木とみ子といました。詩人、八木重吉の未亡人です。そこには、創作ではない凄みのある日常があるのですが、紙数の制約でそのうちに。（おわり）

語で一般の人は知りもしないし、使わない言葉でした。

そんな言葉が大手をふっているのが悲しいし、私は使わないようにしています。「断捨離」という言葉が流行ってきたのと同じ頃からでしょうか。もう住んでいない土地の墓はかたづけなくては、という強迫観念にせまられている人がいます。

先日、墓地閉眼（へいげん）のお経をあげたのは、高級石材の小松石（こまついし）で作られた墓でした。お経をよんだ後で、墓所の持ち主にたずねました。

「最高級の石塔で、今つくればもの凄なお金がかかるお墓だよ。それでも捨てるんだね。それに、あなたが亡くなった後はどうするの？」

若くはない当主からは、次のような答えが返ってきました。「墓石に刻まれた名字の字体も好きですが、息子の世代に迷惑をかけないように、供養不要な墓地を探します」

好きだったら捨てるなよ。墓地から一時間も電車にのれば帰れる距離に住んでるのに。まあ、住職の人柄が嫌われたならば仕方ないけれど。最近の言葉に持続可能な社会（SDGs）っていうのがあるじゃないですか。明日を見すえて、次の世代に迷惑をかけないように、この自然環境を手渡そう、というのでしょ！

まだ使えらるとびきり高級な材料を捨てて、新しく海外の山から切りとってきた石のなかに入る。というのは未来への持続可能な活動ではないですね。自分の過去を捨てたから、明日も見えないご本人は、捨てた寺の住職の文なんか読まないだろうから、失礼なことを書きました。

お墓は捨てるものではないし、護るものでもありません。持続できるように悪いところをなおして、使い続けていく貴重な財産です。